

「絵に国境ない」伝えたい



ウクライナとロシアの子ども絵画展

松江で11月 県立大生が準備

ロシアのウクライナ侵攻に巻き込まれた、子どもたちの暮らしについて考えてもらおうと、島根県立大人間文化学部が11月、両国の子どもが描いた絵80点を松江市内で展示する。「絵に国境はない」というこの点を松江市内で展示する。「絵に国境はない」というこの点を松江市内で展示する。「絵に国境はない」というこの点を松江市内で展示する。

(小引久美)

絵画展は11月20～29日、島根県民会館(松江市殿町)1階のプロムナードギャラリーで開く。

ウクライナとロシアに住む3～14歳までの子どもが描いた絵を展示。大人がすっかりだした悲慘な戦争下でも、未来に期待し成長する子どもたちがいることを忘れてほしくないとの願いを込める。アジアでも紛争が起きていることを踏まえ、ミャンマーの子どもが描いた絵も展示する。

保育教育学科美術教育学研究室の福井一尊教授(47)が絵画展を提案。子どもと関わる仕事を目指す研究室の3・4年生7人が賛同し、3月から準備を進めてきた。

1日にあつた事前協議に

ロシアとウクライナの子どもが描いた絵を見ながら、展示の広報について意見を申し合う学生。松江市浜乃木7丁目、島根県立大松江キャンパス

は4年生4人が参加した。国境で線引きされているものの、同じ気候で暮らすロシアとウクライナの子どもたちが描く冬の情景は変わらないことに着目。「見ている雪は同じだ」などと意見交換した。

「絵を描いた子と同年代の子どもに見てほしい」「子どもを持つ親にも来てほしい」などの意見が上がった。4年生の田中千智さん(22)は「戦争が起きている国でも、日本の子どもと同じように絵を描き、普通に生きているんだと伝えたい」と話した。

障害や特性のある子ども

伸び伸びアート体験

障害や特性のある子どもたちが気兼ねなく遊べる場をつくる取り組みが、島根県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）で始まった。アート体験活動「げんたい、ふるる」で、7月下旬にあった初回には4歳から小学4年生までの4人が魚釣りゲームに声を弾ませた。（山口春悠）

参加した子どもたちは学生をサポートを受けながら、魚の形に切った画用紙に色とりどりの丸いシールを貼った。別室では母親たちがわが子について、海に見立てて広げたブルーシートに魚を並べ、船や島を模した踏み台に立ち、



魚を釣り上げて遊ぶ参加者＝松江市浜乃木7丁目、島根県立大

島根県立大松江 学生有志がサポート

の好きな息子にいつも付き添っているという母親を、他の参加者が「すごい」とたたえるなど、日頃の努力を認め合った。発達の心配を相談する場面もあった。

知的障害のある子を育てる松江市内の女性（46）は「学生が付いてくれて安心して遊べた」と喜び、娘と参加した東部の女性（29）は「伸び伸び遊んでいてよかった。また参加したい」と笑顔だった。

「コミュニケーションが苦手だったり、聴覚や視覚が敏感な「感覚過敏」があったりする子どもは、外出先の選択肢

が限られる。障害に対する周囲の理解不足から、公園など公共の場を利用しにくいケースもある。

そうした事情のある子どもたちのために人間文化学部保育教育学科の水内豊和准教授



学生（右）にサポートしてもらい、シールを貼る参加者＝松江
市浜乃木7丁目、島根県立大

e@gmail.com

「良いところ探し」の名人になってほしい」と参加を呼びかける。

次回は9月23日午前10時、正午。大学周辺を散策して拾った落ち葉やドングリで工作する。12月23日、来年1月20日、同3月23日もある。無料。問い合わせは水内准教授、メール ccbpab2023shinan

（47）＝臨床発達心理学と保育士や幼稚園教諭、特別支援学校教諭などを目指す同学科の1年生有志が企画した。学生にとっては学びの場になった。1年の安藤楓美さん（18）は「障害のある子への接し方が分からなかったが、シールの見せ方を工夫したら、自分で貼ってくれた。打ち解けてくれてうれしかった」と振り返った。

他の親子や学生との一体感の中で遊ぶ経験は、家族で出かけるだけでは得難く、保護者同士の交流は、わが子の長所や成長を客観視し、自分の頑張りを認める機会になるといふ。水内准教授は